

事業 番号	事業名	事業概要		確定額 (千円)	事業区分
		事業実施により実現できた具体的効果・成果			重点等
	事業者名	実施地等			
		実施期間			
URL					

内38	第11回環太平洋木質バイオマス複合材料シンポジウム	<p>持続可能な社会形成のためのツールとして注目されている木質バイオマス利用技術について、マテリアル利用を学術上の核とした国際シンポジウムを11月27日から30日にかけて静岡県コンベンションアーツセンターグランシップで開催した。</p> <p>木質を構成する炭素は大気中の二酸化炭素に由来し、木質パネルだけでも13億トン以上の炭素を固定している事実が示すように、木質バイオマスのマテリアル利用技術はカーボンシンク機能を強化する技術である。また、材料として使用した後にエネルギー回収が可能であるため、バイオマスエネルギーの貯蔵機能技術でもある。世界的に木質資源が逼迫する中、わが国は豊富な人工林資源を有しており、主要な植林木であるスギは広義には早成樹に分類され、その利用方法は世界の木質関係者から注目されている。またバイオマスエネルギー利用とマテリアル利用の両立が緊急の課題となる中、日本は建築技術として利用される木質のリサイクル率が90%を超えるなど、最先端の再資源化技術・システムを有することから、日本開催の要望が高かった。これまで、オセアニア、北米、アジア、東南アジアの4地域で10回開催されてきたが、わが国での開催は1996年の1回のみであり、研究が進む日本の貢献が望まれていることから、本研究集会の開催の適時であり、適地であった。</p> <p>北米レインフォレストの優良木質資源、オセアニアの早成樹などの従来からある木質資源に加えて、東南アジアのプランテーション資源、アジアの竹や農業残渣のリグノセルロース資源、欧州のバイオマスエネルギー利用の加速など、多様な技術課題を抱えるなか、マテリアル利用を学術上の核とした本研究集会では、100件を超える研究発表により課題解決型の論議を通して、社会が抱える喫緊の課題に対する提案がなされた。</p> <p>これまで、軸材料(timber products)、面材料(panel products)、セルロースナノコンポジットなど、個々の製品や高機能材料に関して進められてきた個別の研究が、カーボンシンク(炭素貯蔵)機能という評価軸を得て、共通の課題とした国際的な連携が始まる契機となった。また農産廃材などリグノセルロース系材料の利用技術に関する研究交流が進展し、木質バイオマスの利用が、環境影響の極めて低い持続可能な社会形成のためのツールとして有用であることが証明された。</p> <p>なお、本国際会議の開催に対し、IUFRO(国際森林研究機関連合)理事長より大会委員長宛に感謝状が発行されている。</p>	2,053	国際会議
	第11回環太平洋木質バイオマス複合材料シンポジウム運営委員会	<p>【実施地等】静岡</p> <p>【実施期間】2012/11/27～2012/11/30</p>	【重点事項 該当事業】	
	<p>http://biocomp2012.ipc.shizuoka.ac.jp/</p>			